Japan College of Social Work
日本社会事業大学

Social Workers

社大OB・OGがつむぐ福祉の絆　ソーシャルワーカーズ

仲間との連携は密に楽しく
社会福祉法人 至誠学舎立川　児童養護施設 至誠学園の皆さん

2016
12月
Vol.14

子どもたちの育ちを支え、自立への力を養う「実家」づくり

何らかの理由により家庭で生活ができなくなった子どもたち。
虐待による発達障がいを伴うケースも増える中で、子どもたちの育ちを支え、
社会で生きる力を養う自立支援の取り組みを紹介します。

interview
やまだ しゅんいち
山田俊一 さん
社会福祉法人 至誠学舎立川
児童養護施設 至誠学園
自立支援コーディネーター

interview
社会福祉士
くの とおる
久野 亨 さん
社会福祉法人 松葉の園
自立援助ホーム まつぼっくり
児童指導員兼ホーム長

自立後の生活をともに考え、計画し、社会で生きていく基盤を養う

社会福祉学部 福祉援助学科
2005年3月卒業

久野（くの） 亨（とおる） さん 社会福祉士

社会福祉法人 松葉の園 自立援助ホーム まつぼっくり
児童指導員兼ホーム長

PROFILE

1980年　北海道出身
2005年　社会福祉学部福祉援助学科卒業
2007年　松葉の園入職（4月）
　　自立援助ホームまつぼっくり入職（10月）
　　現在に至る

みんなが食事や会話に集う食堂兼居間

ゆったりとした吹き抜け空間で寮生たちをお出迎え

住宅街にある「まつぼっくり」はまさに実家の佇まい

ボランティアの経験、大学での学びから、自立支援へ

「子どもたちの成長・自立を見られることがうれしい」――。

久野亨さんは専門的な知識やスキルを学ぶために日本社会事業大学に進み、在学中から5年間ボランティアを経験しました。卒業後は1年間一般社会で働き、社会福祉法人松葉の園で非常勤として2007年4月に入職。板橋区の本園に勤めて半年後、実務経験が評価され、同園が西東京市に開設した自立援助ホーム「まつぼっくり」のホーム長に抜擢されました。

自立援助ホームは、施設や養育家庭を退所または家庭の事情などの理由で家族と暮らせない15～20歳の児童が生活し、自立の準備をする場。「子どもたちの実家的なもの」と久野さんは表現します。現在、5人の寮生が共同生活をしています。

自立後をともに考える

寮生は三つの約束を交わします。一つは、働くこと。「アルバイトだけでは適性に合わず続かなかったり雇用が不安定なため、自立前には寮生に適していて正社員として働ける場を、ハローワークに同行して探します」と久野さん。約束の二つめは寮費を払うこと、三つめは自立のための貯金をすることです。

「毎月給料日に一人ひとりと面談します。寮にいる間の目標や自立後の生活をともに考え、計画を立て調整するのです。育った環境も年齢も、仕事も異なるので、いつでも個別に相談に乗り、グチを聞いたりもします」

最も悩んだのは、解離性同一性障害（多重人格障害）の子どもへの対応でした。「突然、別の人格が現れて通常の会話ができなくなったり、倒れてしまったり……。精神科医や児童相談所、弁護士らと連携し、そのおかげで自立に至りました。地域や専門家とのネットワークの大切さを実感しました」

大学時代は自分を見つめ直し、「自己覚知」する機会

なぜ久野さんは、福祉援助の仕事を志したのでしょうか。

「妹が知的障がい者で、祖母が認知症だったのですが、両親が世話をし、自分は何もできませんでした。高校時代には、親から虐待を受けて自殺未遂を繰り返す友人がいました。家庭の問題について考えることが多く、何とかしたいと思ったのが始まりです」

その気持ちをより強くしたのが、大学時代の自立援助ホームでの実習でした。重度リストカッターの女性と出会い、洗濯板のようになった腕の傷跡を見せられて「頭の中がぐちゃぐちゃだ」と言われ、ショックを受けたそうです。このような人たちに元気になってもらいたいと思い、施設スタッフの対応力に憧れたと言います。

ただ、実際に援助の仕事に携わってきて、「人のためという思いだけでは続きません。自己覚知が必要」と久野さん。「なぜ自分は援助の仕事をしたいのか。大学時代は自分の根本を確認する機会です。人に腹が立つときは、相手に自分自身の嫌な面が見えているのです。何が足りないのか自問したり先生や仲間と話し合うことも大切です」。ゼミの先生に教えられた言葉は、今も指針だと言います。「援助とは、ただ居ること」「自立とは、助けてと言えること」――シンプルで深い言葉に込められた意味をかみ締め、子どもたちと向き合っています。

久野さんのある日

（日によって業務内容は変わります）

11:00 この日は当直のためこの時間に出勤。担当者から業務を引き継ぐ。前日からの寮生たちの状況を確認

13:00 夕食の食材など必要な物の買い出し

14:00 東京都などに提出する申請書類等の作成

16:00 関係各所や家族などに寮生に関する相談や情報共有のための電話

17:00 夕食の準備。仕事から帰寮する寮生たちを迎える

19:00 夕食

20:00 寮生たちと個別で面談。目標の確認と、給料の使い方や貯金などの計画づくり

22:00 寮生たちからの相談を受ける。翌日の業務の準備。当直

社会福祉学部 児童福祉学科
1996年3月卒業

常に疑問を持ち、誰のためかを問う。多様な視点で支援のあり方を追求する

山田 俊一（やまだ しゅんいち）さん

社会福祉法人 至誠学舎立川
児童養護施設 至誠学園 自立支援コーディネーター

PROFILE

1972年　神奈川県出身
1996年　社会福祉学部児童福祉学科卒業

至誠学園は児童養護施設として1951年に開設

学生時代に意識を変えてくれた本

子どもたちが暮らす「レジデンス銀杏」

子どもたちがどう育っていくか、明確な計画で支援

児童福祉の専門機能を100年以上にわたって提供してきた至誠学園。山田俊一さんは、ここでケアワーカーのキャリアを積み、現在は自立支援コーディネーターとして子どもたちのサポートに携わっています。

「自立支援コーディネーターは東京都が独自に児童養護施設に配置している専門職で、2012年に始まりました」と山田さん。5年以上の継続勤務経験と、研修の受講が条件となります。自立支援計画書や退所後援助計画書を作成し、その計画に基づいて支援を行う仕事です。

至誠学園では、本体施設に四つのユニット（ホーム）があり、立川市、日野市、国分寺市にまたがって五つのグループホームと地域小規模施設を併設し、各ホームに3人の常勤職員が中心となってケアをしています。

自立支援コーディネーターは、子どもたちと日々触れ合っている各ホームのケアワーカーが作成した計画書をもとに、セラピスト（心理職）やファミリーソーシャルワーカー、精神科医など様々な分野の専門職を集め、一人ひとりの子どもにとってより良い自立支援計画書へと練り上げていきます。この計画内容を児童相談所など関係施設・機関と共有し、必要に応じて連携できるよう調整していくのです。

「計画は子どもたちの将来像やストーリーが見えるものでありたい。そのために必要な情報として本人の思いや強みを反映し、関係者の誰が見ても分かりやすく、いつ、何を、なぜ、どのように行うのかを明確に示す必要があります」

特に大事なアフターケア、「実家的機能」の大切さを痛感

そのためにも、児童相談所や専門家と連携して一人ひとりの情報を整理し、どんな支援ができるのか、その期間はいつまでが適切なのか、当人は入所することをどのように理解し、どんな生活をしたいのかなどを検討し、受け入れ態勢を整えます。「アドミッションケア」です。

「入所する子どもの8～9割が何らかの虐待を受けています。親自身も虐待を受けて育っていて虐待の連鎖になっているケースや、そこに親の精神疾患や薬物依存、DVなども絡んでいたりします。家族のさまざまな問題を背負って育っているだけに、専門家や関係機関と連携したアドミッションケアはとても重要です」

そのうえで自立支援計画に基づく「リービングケア」を通じて、子どもたちの進学や就職という節目をサポートしていきます。現在、児童養護施設からの大学進学率は3割程度。一般家庭の7割と比べると低いものの、ここ数年で高まってきていると言います。「進学率を上げるとともに大学の4年間をサポートする必要があります。『頑張って』と励ますだけでは継続が難しいことが多いからです」

このような退所後の相談に応じる「アフターケア」は、自立支援コーディネーターの特に重要な役

○山田さんのあゆみ

1996年	日本社会事業大学福祉学部児童福祉学科卒業 社会福祉法人至誠学舎立川至誠学園入職 児童指導員としてホーム担当のケアワーカーに従事（当時は大舎制）
1997年	年度途中から本体施設を新設し、ユニット制の中舎制のケアワーカーとなる
1999年	グループホームのケアワーカー。 以降、グループホーム担当となり、移転や新規立ち上げ等を経験
2015年	自立支援コーディネーター。現在に至る

「自立支援コーディネーター」の業務とは?

1. 自立支援計画作成の助言および進行管理
2. 学習・進学・就労支援
3. 高校中退者など個別支援が必要な生徒に対する生活・再進学・就労支援
4. 退所者の状況把握および援助などのアフターケア

割となっています。「昨年度は1000件以上の相談があり、退所後10年以内のケースが多い」とのこと。進学しても仲間ができず、不登校になる。職場でのコミュニケーションがうまくできず、職を転々とする。その結果、経済的に困ったり、住む場所がなくなってしまったりして、相談に来ることが多いのです。

「相談に来てくれる場合はまだいいんです」と山田さん。園の行事や週末になると遊びに来る方、結婚や出産の報告に来る方もいる一方、自暴自棄になってしまったり、お世話になった園にはもう頼れないと思い込んで孤独を深めてしまうこともあるそうです。気軽に話をしに来てもらえる「実家的機能」を持った場づくりの大切さを痛感したと言います。

「自立支援コーディネーターという存在の認知を広げる必要があります。そのキーとなるのが、卒園生とのつながりです。以前は電話をしてもつながらないとか、住んでいるところが変わるともう追えないといったことがありました。今はSNSが普及しているので、『あの子は今、どうしてる?』と発信すれば、卒園生たちのネットワークで情報を入手できることもあります。少しずつですが、連絡を取れるようになってきています」

虐待という現実を知って福祉に関心を持ち進学

山田さんが福祉の仕事を志したのは、高校の先生から薦められた1冊の本がきっかけでした。

「小学校高学年の時に近所にガキ大将がいて、これからはおまえが引き継げと言われたのです。年少の子たちのけんかを仲裁したり、誰かが病気になれば親を呼びに行ったり。いろんなことを経験し、将来は先生のような仕事ができればと思ったんですね。その気持ちを抱えながら高校生になって先生に相談した時に、家族の現状に関する本を手渡されたのです。虐待という現実を知り、気づけば子どもの頃に思いを馳せていました」

発達が遅れていた子、経済的に困難な家庭……不登校になった子の家に行くと、ごみがあふれた部屋にその子がうずくまっていた。家族は何が原因で変わってしまうのか、どうすればそういう問題をなくせるのか、疑問が湧いたと言います。福祉に関心を持ち、専門的に学べる日本社会事業大学に進みました。

いろいろな視点で物事を見て、誰のためかを常に意識

「1年次の特別授業はいまだに覚えています。テーマは『デス・コミュニケーション』。より良く生きていくために、死を学ぶ。終活という言葉もなかった時代です。いろんな視点で物事を見ることが大切なんだ、自分には他人に負けないと言えるものがないのだから、いろんなことを吸収しようと思えたのです」

そして至誠学園に入職すると、ケアワークのあり方が子どもの目線でどんどん変わりました。当初は2人で10人前後の子どもたちをサポートする大舎制。数年後に現在のユニット制に変わり、4人で15人の子どもをみるように。現在は3~4人で6~8人の子どもを支えています。

「小規模化し、手厚いケアができるようになったと思います。ケアワークの過渡期を現場で経験する中で、リーダーとしてグループホームの立ち上げなどにも携わり、さまざまな模索をしてきました。この経験を別の角度から生かしたいと思った時に、自立支援コーディネーター制度が立ち上がったのです。まだ始まって5年目なので、自分たちの取り組みがモデルになっていく重要な仕事と捉えています」

これまでの経験から意識していることが二つあると言います。「顔が見える支援」、「誰のためか」ということです。

「今やっていることは本当にこれでいいのか。疑問を持つことで物事の見方が変わり、新しい発想も生まれます。また、自立支援コーディネーターは、社会資源の活用のため、地域や外部団体と折衝することがあります。直接つながることで信頼関係が構築できれば安心して子どもたちにつなぐことができる。それが本当の意味で、『顔が見える生きた支援』になると思っています」

自立援助ホームとは? 子どもたちに生活の場を提供し、自立を支援します

今回お話を伺った久野さんや山田さんが取り組む自立援助の施設について紹介します。

Q1▶ 「自立援助ホーム」とは、何をするところですか?

A1▶ 家庭で生活ができなくなり、働かざるを得なくなった子どもたちに生活の場を提供し、経済的・精神的に自立する準備をする施設です。5～20人のグループホームが一般的です。

●対象と入所条件
義務教育を終えた15歳から20歳を対象とし、児童養護施設等を退所した人が入所します。「働く」「寮費（生活費）を払う」「自立後のための貯金をする」ことが入所の条件です。1人当たりの平均入所期間は半年から1年間とされています。

●主な役割
1人での社会生活が難しい時期で、虐待などで精神的な問題を抱える子どもも多いため、生きていくための家庭的な後ろ盾となります。日常生活のスキルはもとより、就職先の開拓や日々の相談等の援助をします。退所後のアフターケアも行います。

Q2▶ 施設数や入所者数はどのぐらい?

A2▶ 厚生労働省家庭福祉課の調査（平成27年10月1日現在）によると、自立援助ホームは全国に123カ所。定員826人に対して現員（入所者）486人で、職員総数は519人となっています。それぞれの数値は年々増加しています。

Q3▶ どのような子どもたちが入所しているのでしょう?

A3▶ 平成25年2月1日現在の同調査では、入所者の27.4%が「両親ともにいない、または不明」で、「被虐待経験がある」子どもは実に65.7%に上ります。知的障がいや学習障がい、発達障がいなど、何らかの障がいのある子どもも37.0%となっています。

Q4▶ 具体的には、どのような援助を行っているのですか?

A4▶ 子どもたちと共同生活をしながら、自立までの目標と計画を立て、実現に向けて援助します。ハローワークに同行して子どもの適性に合った仕事を探したり、働いて得たお金の使い方をアドバイスしたり、日々起こったことや将来などについて相談に応じます。社会に出てからも失敗を経験することがあるため、相談対応を退所後に継続することも重要な役割です。

発行：日本社会事業大学 〒204-8555 東京都清瀬市竹丘 3-1-30
電話：042-496-3080（入試広報課） URL：http://www.jcsw.ac.jp